

支え合う社会を守っていきたい

さいたま市立浦和中学校 2年 上崎 凌

この夏、東京オリンピックが開催された。僕はとても感動したが、その中で気になるニュースがあった。中国の金メダリストが金メダルの報奨金を彼女の母親の治療費にしたいと言ったという話だ。

僕はこのニュースに衝撃を受けた。僕の中では、メダルを取るほどの選手は国から守られており、練習に専念できるほど裕福なイメージだったからだ。彼女だけではない。他にも、金メダルをオークションに出品した選手もいる。自分と同世代の彼女らが、報奨金を使わないと病院で治療を受けられないだとか、金メダルを手放さなければならぬほどに生活に困窮しているなんて。

僕は、小五の時からアレルギーの治療で毎日薬を服用している。花粉症がひどく、その季節になると、目と鼻がとにかく痒くなり、丸ごとむしり取りたくなる程不愉快なのだ。だから、毎月病院で診察を受け、薬局で一カ月分の薬を処方してもらっている。僕の住むさいたま市では、中学三年生まで「子ども医療費助成制度」があり、中学を卒業するまでは、病院での診察料や治療費、入院費、薬代、予防接種に至るまで公費で助成されているおかげで、僕は今のところ窓口で医療費を負担しなくても良い。この公費は、父や母を始め、たくさんの方々がお納め下さっている税によって支えられている。言ってみれば、僕は多くの方々のおかげで治療を受けることが出来ているのだ。その治療の甲斐もあり、僕のアレルギーは年々良くなってきている。本当に感謝してもしきれない。

また、僕の母は長年癌を患っており、その治療費や検査代、薬代は本当に高い。しかし、高額になる医療費のための「限度額適用認定」を受けているおかげで、窓口での支払いは限度額以上になると、それ以上支払わなくても良い。高額な治療費を心配せずに安心して医療を受けることが出来ている。これも税の支えのおかげだ。

多くの人々は、納めることには敏感だが納めた税金がどのように自分の生活に結びついているのか実感するのが難しいかもしれない。それは今の自分たちの生活が当たり前だからだ。金メダルを売らなくては生活できないとか、医療費が高額過ぎて受けることも出来ないという暮らしではなく、必要な医療を受けることが出来る、学校で教育を受けることが出来る、病気などで働けなくなったときに最低限の生活を送ることが出来る、そういう僕たちの生活が税によって支えられているのを意識してないだけなのだ。

まだまだ世界中では新型コロナウイルスが猛威を振るっている。経済は冷え込み、個人消費も落ち込んでいる。誰もが不安だ。感染して収入が途絶えるかもしれない。医療費を払えなくなるかもしれない。そういう不安を抱かずに済む社会をこれからも守っていけるように僕も頑張りたいと思う。